

# 発信箱



読んだら早く老人になりたくなる本を出したい。鴻池雅夫さん(78)がそんな思いで「老人讃歌」(燦葉出版社)を書いたのは55歳の時だ。当時は山形県・鶴岡教会の牧師で幼稚園長だった。

子どもと高齢者にはどこか通じる神秘的な力がある。なのになぜ老人だけ厄介者と見られるのか。地域の講演会で「老人の生きがい」をテーマに語ってほしいと言われるたびに「生きがいもない存在」というまなざしの裏返しと感

## 磯崎 由美(生活報道センター)

### 老いてこそ

じ、礼拝に来る農村の高齢者たちが生き生きと暮らしている姿をつづった。

それから23年たった今春、

「続 老人讃歌」を出版した。

後期高齢者医療制度への憤りに背中を押されたという。平均

均寿命は延び、パワフルな団塊世代も還暦を超えた。時代

は変わったと思っていたのに

「効率優先で、若くなければ

社会の役に立たない。病気が

ちな老人は今もお荷物としか

見られないのか」。

この間、自らも老いと病を

経験した。同時に地元病院の

囑託カウンセラーとして患者

や家族の話を聞く「しあわせ

医療」を始めた。新刊はその

実践で気づいたことを書いた。例えばがんなどで入院して

きた高齢者は、初めのうち

将来を悲観するばかり。それ

が次第に穏やかによく笑うよ

うになり、逆に鴻池さんを励

ましたりもする。なぜか。

「入院することで、人間本

来の姿になるのでしょうか」。

元気な時には自分のことばかり

考えがちだが、病んで社会

から切り離され、人に大事に

されるうちに人を大事にする

ことを知る。それを鴻池さん

は「成長」と呼ぶ。

老老介護の果ての心中や殺

人。長命時代の悲劇を取材す

る中で、鴻池さんの言葉に触

れた。とても新鮮に響いた。